

(論文内容の要旨)

社会学におけるシカゴ学派は、20世紀末より各国の社会学界において再評価の動きが広がっている。従来、シカゴ学派は質的調査に基づく社会学的世界認識を特徴とする学派であると把捉されてきた。そのようななか、近年新たな研究が蓄積され、シカゴ学派では質的調査だけでなく、量的調査に基づく社会把握にも同様の力点が置かれてきたことも指摘されている。しかし、質的調査と量的調査という二分法の問題をはじめとし、両者をいかに用いるかという方法論の問題が初期シカゴ学派において扱われていたことについては看過されている。本論では、これらの問題を明らかにするために、初期シカゴ学派の動的な人間生態学の世界と方法論の「解きほぐし」の作業をおこなっている。それにより、初期シカゴ学派の社会学者が活用した人間生態学とその方法が、いかにして社会の事象や社会学的方法論の絡み合いを描きうるかを示すことが可能となる。本論でとくに着目しているのは、人間生態学の確立に大きな役割を果たし、黄金時代をリードしたE・W・バージェスと、初期シカゴ学派の人間生態学を完成させたE・F・フレイジアの研究である。この2人の社会学者は、種々の社会学的方法論の二分法の両極を単に両方用いるということではなく、それぞれの絡み合いをあらわす「総合」の立場をとったところに大きな特徴を有する社会学者である。「総合」の社会認識において絡み合わされる社会学的方法論上・事象上の種々の二分法とは、「質的調査と量的調査」、「時間と空間」、「科学と人間」、「生態学的過程と社会政策」などを指し示す。

本論の第1部では、初期シカゴ学派の人間生態学の概略を描くことで、本論の議論の土台となる部分を構成している。後続のシカゴ社会学者が実践基盤としたような、パークとバージェスが目指した有機的な社会認識から導かれる基本的理念が明らかとなる。

第1章では、これまでも内外にて研究が進められてきた基本概念の確認として、パークとバージェスの人間生態学を概括する。それにより、人間生態学におけるパー

クとバージェスの位置づけが可能となっている。パークは人間生態学を社会学に導入する役割を果たしたこと、バージェスは社会学的方法論として人間生態学を精緻化しようとしたことが明らかとなる。

第2章においては、初期シカゴ学派における人間生態学の基本的概念を明らかにするために、シカゴ大学スペシャル・コレクション調査センターに所蔵されるアーカイブ資料を検討している。バージェスの「人間生態学」のシラバスと講義レジュメおよび学生レポートを通して、彼が家族や都市などに問題関心を抱いていたことが明らかになる。そしてその背景にあったものとは、動的な近代社会のなかで彼が持ちえていたような、空間を基礎としながら時間の概念を用いて事象を分析すること等に象徴される「総合」的な方法論的社会認識、および伝統社会から近代社会への変動過程に生きる時代感覚である。

第2部では、初期シカゴ学派の人間生態学が確立されるのに大きな役割を果たしたバージェスに着目し、人間生態学を支える彼の「科学」、「政策」、「人間」概念について検討することで、バージェスの方法論上の「総合」認識を明らかにしている。

第3章では、バージェスの「科学」概念について考察している。バージェスの社会調査論における科学の考え方の変遷をたどるなかで、社会学的調査の意義は何かということを検討している。バージェスの科学的概念は、社会改良と結びついた「科学」、自然科学を参照した「科学」、社会学の独自性としての「科学」、学際的・実践「知」としての「科学」、社会科学者の立場を関係づける「科学」、という形で変容していることが示される。それとともに、社会調査の考え方も、社会改革・改良色の強い考え方から、科学性を強調した社会調査・計画、さらには、知識社会学的視点に触発された文化社会学的考え方へと変化を遂げていったことが明らかにされる。

第4章では、初期シカゴ学派の社会認識には、人間生態学の「対概念」である社会政策論的な視点が内包されていたことが明らかになる。そのために、バージェスの社会政策論関係のテキストが再検討される。主に1910年代、30年代、50年代以降のバージェスの社会調査関連の論文を比較検討することで、バージェスの社会政策

論は、社会改良から社会計画、そして社会福祉へと展開していったことが明らかにされる。

第5章では、初期シカゴ学派の人間生態学において重要な位置を占めている「人間」の概念について再検討される。具体的には、バージェスの「人間」概念のうち、人間性、人道主義、人間的側面の概念を検討している。それにより、バージェスの人間概念は、人間生態学批判の文脈でとらえられるよりも、その後の第二次シカゴ学派の社会学者によるシンボリック相互作用論やスティグマ論を予期するかのようにより、「人間」の価値や意味世界を考慮に入れたものであるということが示される。それと同時に、シカゴ学派のシンボリック相互作用論に対して持たれがちなマイクロ偏重の理論的表象や、肯定的表象にかかわる標語として一般社会に流布している「人間」概念よりも、より社会構造に志向した社会性を有する概念であることが示される。

第3部では、初期シカゴ学派の人間生態学の完成者、フレイジアに着目して検討をおこなうことで、「総合」の実践というシカゴ社会学史上におけるフレイジアの大きな特色を明らかにする。

第6章では、本論における後の論議の予備知識を得るために、フレイジアの『シカゴの黒人家族』（1932）の内容の検討をおこなっている。フレイジアは、『シカゴの黒人家族』において、人間生態学の特質を余すところなく活用し、シカゴにおける黒人家族の分化の過程を描き出すことに成功している。それゆえ、黒人研究者としてのみではなく、純然たる社会学理論・方法論者としてフレイジアを評価することが必要であることが明らかになる。

第7章においては、初期シカゴ学派の人間生態学的方法論が、フレイジアにより完成をみたことが論証される。フレイジアの研究は、バージェスが理念として示した「総合」の社会認識を、シカゴ・サウスサイド黒人コミュニティという具体的な社会的場面で実践してみせたところに大きな特徴がある。フレイジアが完成した「総合」的实践とは、質的と量的、時間と空間の側面を絡み合わせた研究である。フレイジアは、自然地域の研究、時間的側面、空間的側面という人間生態学の基本的特

質をあまねく用いており、それは他のシカゴ・モノグラフにおける人間生態学を用いた研究には見られない特性であることが明らかにされる。フレイジアが実践した総合的手法とは、現在の生態学的研究にとっても大きな可能性となることが示される。

第8章では、人間生態学のもうひとつの側面としてとらえられる、逸脱論における「社会解体論」について考察される。フレイジアが、個人的ドキュメントを活用しながら、人間生態学を、社会的コントロール、社会心理、逸脱の文化学習の視点と理論の形成に生かしていることが示される。社会的コントロール、社会心理、逸脱の文化学習の各側面は、社会解体論の下位理論 (sub theory) なのである。

結論の部分では、バージェスの思想に支えられ、フレイジアの著作から明らかになる、人間生態学的方法の意義について考察される。その意義とは、社会学的方法論上の二分法を絡み合わせる「総合」の社会認識の実践である。わけても、「質・量—時間・空間」の比較と絡み合わせという観点から、人間生態学の意義について明らかにしている。初期シカゴ学派の人間生態学は、質的調査と量的調査、あるいは時間的側面と空間的側面のそれぞれ両方における比較を可能にするところに意義があることを、フレイジアの著作から明らかにしている。そこから、社会科学の基本である比較の方法のひとつのあり方を示している。複雑な人間生態学の世界を解きほぐして理解するために、「量—時間」「量—空間」「質—時間」「質—空間」という形で再構成することで、人間生態学は、社会学的方法論上の二分法に対処する視点を有していることが示されている。

人間生態学の魅力とは、調査対象に接触しながら、社会的事象および方法論上の二分法を「総合」してとらえきる豊穡な記述と分析を可能にするところにある。たとえば質と量の調査で得られた結果は、相互に裏付けられ、絡み合わされて分析される。激動の社会で考案された人間生態学の方法は、問題状況に生きる人々の社会生活の解体と再組織化をとらえる一つの重要なモデルを提供する。このような意味で初期シカゴ学派の人間生態学は、単なる過去の遺物ではなくて現代社会学においても再生されるに値する意義を有した視点であり方法である。

氏 名	にし かわ とも ゆき 西 川 知 亨
(論文審査の結果の要旨) 本論文は、社会学におけるシカゴ学派の方法論的意義を詳細に検討し、現代における社会学的方法論に新たな視点を提案しようと試みた社会調査論に関する野心的な研究である。 本研究が再評価の対象としているのは、20世紀戦間期のアメリカ合衆国の社会学を牽引したシカゴ大学の社会学者たちの営みである。シカゴ学派と総称される、この学派には、ウィリアム・トマス、ロバート・パーク、アーネスト・バージェス、ルイス・ワースといった20世紀を代表する社会学者がつどい、産業資本主義が急成長すると同時に、深刻な社会問題を生み出していた当時のアメリカ大都市社会を対象にして、独特の理論と方法論をもった社会学を発展させていった。日記や手紙といったヒューマン・ドキュメントを活用した生活史の再構成、社会の底辺に身を置く徹底した参与観察法、さらには、個々人が環境に適応するなかで自生的に都市社会が形成される過程を生態学的に定位した「人間生態学」理論や、都心から郊外にかけて遷移と凝離を繰り返しながら都市の拡大をとらえた同心円理論など、シカゴ学派は、その後の社会学的方法と理論に大きな影響を与えてきた。しかしながら、第二次大戦後、アメリカ社会の構造変動を背景にして、社会学の領域では、タルコット・パーソンズに代表される、より緻密でシステム論的な社会学理論が支配的となり、シカゴ学派の方法論と理論枠組は、影響力を喪失していった。ところが1990年代にはいり、社会科学の方法論的自省の思潮のなかで、シカゴ学派の再評価がはじまった。日本においても、宝月誠、中野正大を中心として、シカゴ大学と連携した再評価プロジェクトが多く成果をあげている。 本研究は、こうした研究史上の系譜に属しながらも、シカゴ学派自体の認識を刷新し、そのなかから新たな可能性をすくいあげるという次元において、従来の「再評価」スクールとは一線を画した点で、シカゴ学派研究の進展に大きな貢献を果たすものとなっている。	

西川論文の意義は以下の三点にまとめることができる。

第一の意義は、シカゴ学派社会学のもつ方法論的特徴として、「総合」性に注目しその意義を明らかにした点である。社会調査法の学説史においては、計量的データを集積し、実態や変動の方向性をマクロに描き出す「量的調査」と、参与観察やインタビューなどによって、ミクロな個人の社会生活の深奥から社会の断面を抽出する「質的調査」とが、理念的に区別され、その対立、補完、棲み分けなどが議論されてきた。20世紀後半のアメリカ社会学を支えた主要な方法論は、「量的調査」にもとづくものであったが、それへの批判・反動として、20世紀末から、「質的調査」の見直しが進展した。シカゴ・ルネッサンスと呼ばれるシカゴ学派再評価もこの文脈においてなされたものだった。しかし西川氏は、シカゴ学派を「質的調査」のチャンピオンとして表象しようとする試みを、シカゴ学派の意義を切り縮めているとして批判する。彼は、戦間期のシカゴの家族を対象にして詳細な「量的調査」を行ったウィリアム・オグバーンなどの調査法を検討して、シカゴ学派の方法論的特質は、「質的」部分ではなく、「質的調査」と「量的調査」を接合し総合する視座にあることを実証的に示した。「総合」は、今日の社会学のほとんどのテキストが指摘しているように、たんに「質的」なデータと「量的」なデータを組み合わせたり、つなぎ合わせたりするという方針からは出てこないと西川論文は主張する。その組み合わせやつなぎあわせが、具体的にどのように実践され、どのような視座のもとに統合されているかを重視するのである。西川氏は、そのために、シカゴ学派のなかでも総合への志向の強かったバージェスに注目し、当時のシカゴ大学での講義録やシラバスの検討を通して、バージェス的総合の視座を解明していった。

第二の意義は、バージェスが提案した人間生態学の同心円理論について、そこに社会政策的志向を見だし、社会改良とむすびつく社会調査法として再定位した点である。人間生態学は、前世紀初頭、世界の工場として世界各地からさまざまな言語文化をもった大量の移民が、合衆国の大都市に流れ込み、スラムや人種民族別ゲットー、あるいは高級住宅街をつくりあげるなかで、貧富の格差や犯罪、非行、売春といった社会問題が噴出していた状況から生まれたものだ。そこには、都市社会は、

都市計画とは別個の次元で、個々の住民の環境への適応努力によって、生態学的に生成されるという認識があった。そこにおいては、社会政策（改良）と人間生態学はまったく正反対の立場に位置していた。しかし西川論文は、バージェスの人間生態学のなかに、社会改良、社会改革、社会福祉的要素を認め、社会計画とつながる科学的社會調査を構想していたことを明らかにした。そのために、バージェスが社会調査を実施するさいに構想した「人間観」と社会政策を包含する知としての社会学観を詳細に検討した第4章、5章は、本論文の精華といってよい。

西川論文の第三の意義は、「総合」の具体的実相とそれを支える視座について、バージェスの後継者であり、もっとも「総合」性を帯びていたとされる、アフリカ系アメリカ人の社会学者E・フランクリン・フレイジアの研究から説得的に導き出している点である。フレイジアは、『シカゴの黒人家族』において、サウスサイド地区で暮らす黒人家族の分化過程を、量的データ—質的情報、時間的変異—空間的移動の4象限に分けて解明した。西川氏は、この4象限モデルをシカゴ的「総合」の視座としてとらえ、現代的応用性にまでふみこんで定式化したのである。

このように、西川論文は、これまでのシカゴ学派再評価の研究に新たな視座から光をあて、みごとな成果をあげていると高く評価することができる。しかしながらいくつかの点で不満ものこる。一つは、バージェス、フレイジア以外のシカゴ学派の「総合」性についての資料の検討が不十分であること、さらに二人の総合性に関する資料の取り扱いに些か恣意的な点が見受けられることであり、第二には、戦間期のシカゴ学派の方法論的検討の説得力と比べ、その現代的意義の説明が脆弱である点である。しかしながら、これらの問題点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年6月11日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。